

地域と大学がともに生き残るには
といつた姿勢である。
だが、少子高齢化が本格化する時代
に入りて、そうした中途半端な姿勢は
大学が地域からの要請に応えて「知
恵袋」としての役割を果たすという事
許されなくなつた。地域と大学が問題題
にあって、その高齢化が本格化する時代
といつた姿勢である。

地域と大学がともに生き残るには
といつた姿勢である。
だが、少子高齢化が本格化する時代
に入りて、その高齢化が本格化する時代
といつた姿勢である。

地域住民のニーズに応える努力を重ね
て実践教育プログラムとして再構成
(公開講座)の開設を通じて地域や地
域住民の委員会など行政の求める人材
とのお付き合いの歴史の中で、各種
審議会の委員会など行政の求める人材
がそもそも始めただった。当初は文
部省が高島平団地に関する研究会を開
催し、高島平再生プロジェクトを設けたの
が、07年に地域貢献を通じて学生を育
てる実践教育プログラムとして再構成
され、「現代的教育ニース取組支援プロダ
クタム(現代G.P.)」に応募したところ、
幸運にも採択されるに至った(助
成期間3年、補助総額470万円)。

ではあっても、「問題意識の共有」で
無責任な部分が生まれてしまう。端
的に言えば「大学はメニューを提供
する総戸数約1万户、居住人口約
2万人を抱える日本でも有数の大型団
体」から、「2万人を抱える日本で自由に
しますから、あとは皆様で自由に」



抱えて各地の団地から活気が失われた
といわれて久しいが、大学も少子化の
大波に襲われ、受験生の獲得に苦労す
る時代に直面している。住民と大学が
一緒につなって元気を回復する方策を探
ついていくうちに実現したのが、このコ
ミュニティカフェを中心とした一連のホ
ームティアイディア活動である。

ふだん教室では見られない生き生きし
めるのは大東文化大学の学生スタッフ。
シリスマセ会を開いた。会の進行役を務
めたり商店街にある「コミュニケーション
エ・タリーン」に集まつて賑やかなク
レーンばかりの拍手が鳴り響く。お世辞
に隣接する高島平団地に「コミュニケーション
小屋」が東京・高島平団地内のさくら通
り成る即席の合唱団。が上がると制
私たち大東文化大学が、キヤンバス
男女が東京・高島平団地内のさくら通
年12月23日午後、70名余りの老若
事だ。手狭な会場を代りそろに動き回
に元気になる」とはまさにいういふ
茶菓をサービスするのは地域住民か
で統いた。「人と人とがつながり、お互
いをうのだとつづくへ実感した。
た笑顔が印象的である。エプロン姿で
声が震れかえり、それは日が暮れるま
る。会場には、相談のない笑顔と笑い
「高齢化」や「老朽化」という難題を
子どもたちと高齢者には大受けであ
から2年近い歳月が流れた(当初の店
例も一般化している。大東文化大学も
て、2004年に地域住民と大学教員も
高島平再生プロジェクトを設けたの
の有志が、高島平団地に関する研究会を開
催玉県東松山市(東松山キャンパス)や
地元・板橋区(板橋キャンパス)や
埼玉県東松山市(東松山キャンパス)が
が、07年に地域貢献を通じて学生を育
てる実践教育プログラムとして再構成
され、「現代的教育ニース取組支援プロダ
クタム(現代G.P.)」に応募したところ、
幸運にも採択されるに至った(助
成期間3年、補助総額470万円)。

ではあっても、「問題意識の共有」で
無責任な部分が生まれてしまう。端
的に言えば「大学はメニューを提供
する総戸数約1万户、居住人口約
2万人を抱える日本で自由に」

●高齢化の団地を元気にするには 多世代共住・多文化共生を てこに新たなコミュニケーションから — 東京・高島平団地での居住プログラムの試みから —

大東文化大学教授
篠原 章

【養蜂事業】 大学内で養蜂事業を実施。回収した蜂蜜は地元菓子店の協力を得てお菓子の材料として使用。

【廃油リサイクル活動】 古くなつた食用油を回収し、リサイクル石けんを作ることで資源を循環させる活動を推進。

【災害時支援プログラム】 地元消防署の指導で、居住学生は大地震などの災害時に被災した住民を支援するプログラムのための訓練に参加。

【高齢者向け膝イタ体操教室】 エレベーターのない棟もあり、階段の上り下りで膝を痛めてしまつた高齢者も多いため。そこで、本学教員が開発した膝の痛みを緩和する体操を教える教室を定期で開催。

【災害時支援プログラム】 地元消防署の指導で、居住学生は大地震などの災害時に被災した住民を支援するプログラムのための訓練に参加。

【養蜂事業】 大学内で養蜂事業を実施。回収した蜂蜜は地元菓子店の協力を得てお菓子の材料として使用。

「地居住」と「コマユニティ・カフェの運営」を図で始めたが、団地の現状をみると、若い力で団地を元気にしようと意図で始めた。高齢者の現状を考えれば、わざわざかばかりの学生が団地に居住しても状況は変わらないという意見もあつたが、団地での取り組み以前から私たちが進めていた中板橋商店街での活性化事業では、10名から20名の学生が商店街に定期的に出入りするた
めにつながった。この経験から、高齢者で代共住」という発想には可能性があると考えたのである。

団地居住プログラムは、08年2月に始まつた。大学がHJRと契約して団地の空き住戸を借り上げ、それを学生に貸し出すというスタイルである。借り上げ家賃と貸し出し家賃との差額1万円(月額)は、大学が負担している。その代わり学生は団地のボランティアとしての活動をする。

教育の成果
多彩な地域貢献

の果たす役割はきわめて大きい。

留学生に魅力的な団地

わなければ、すれ違えないほど眠わない地盤が目立ち、一部の時間帯を除き、「開放」とした通路にわざかばかりの高齢者「といた状態になつていて、「閉じた」団地内の商店街も今や空き店舗が多い。地域の居住者の年齢構成をより詳細に見ていくと、賃貸型団地が大半を占める高島平2丁目の55歳以上の人口は約54・6%。分譲型団地が大半を占める高島平3丁目では、49・6%となつていて。人口の約半数が55歳以上の人口で占められている計算である。独居老人の数も急増しており、その数は1000人を超えるといわれている。高島平団地の「高齢化」はもはや放置できない状態になりつつあるといつてよいだろ。

開拓するには不可能である。私たちで生きることは、現在の活動を地道に継続し、一人でも多くの方にカフェに来ていただき、ブロタラムに参加していただきたい。そのために、住民の方々の協力を得ながら、ブロタラムのメニューと一緒に改善を進め、学生の若い力で地域に笑顔と良い声を増やしていくことが最善の道であると考へている。

本年度で文科省の補助金は終了する。少子化による大学冬の時代を迎える。大学の財政もますます厳しくなる。多世代共住・多文化共生型地域の「多世代共住・多文化共生型地域貢献プロジェクト」は、21世紀の高島平団地に新たな「コミュニティ」を作り出しますきつかけになると考えている。今後も大学や住民の方々の理解と協力を得ながら、学生たちとともに息の長い活動を進めていく覚悟である。■

きつかけ

らいネット高島平」に変更し、コミュニティカフェも「サシタ」から「グリーン」に改称したが、これも三者協議会に集まつた30人前後のメンバーが皆で十分話し合つた結果である。

住民や学生から、「教員がもつといふある」との意見が出されることは、全員で議論し、できるだけ多くの参加者が納得する方向を選択すべきであると考えている。もちろん、大枠を設定するには教員の仕事だが、現場の活動に与えるのは教員の仕事だ。

言にじどめるべきである。

このほか、住民・学生による一連の活動を収録したドキュメント・ビデオ図した地域貢献教育の成果であるといわれた事例だが、これこそ私たちの意図した地域貢献調査など地元の実地調査、都市再生シンポジウムなどを中心に進められていくが、学生の中には「家賃補助」というインセンティブ（誘因）にひかれて居住プログラムに参加したもの、ボランティア活動の席では、教員と一緒に「メンバー」と思われる方向を選択する。ただし、大半の席では、教員と誰でも参加できる協議会議会である（月1回開催）。活動に関する三者協議会では、住民、学生、教職員からなる三者協議会であります。住民、学生、教職員ともに活動の方針を意思決定するのプロトコムのあり方を決定するのプロトコムによって進めているが、活動の方向性や、住民独自の資金を原資に、大学が主体と一連の活動は、文科省の補助金と大私たちの望むところだからである。

つてよいたる。「団地を元気にする」「こと」「学生を元気にする」といふ二つの目標を同時に実現する「こと」の実現を目指す、「高島平学」調査作、団地基本調査（居住実態調査・意識調査など）の実施、「高島平学」の実地調査など）の実施、「高島平ネッサンス」の開催などの取り組みも進めている。

こうしたプログラムの多くが、居住を中心とした地域貢献型科目的開設、内外団体の実地調査、都市再生シンポジウムなどを中心に進められている。



「山梨県立農業研究科博士後期課程修了。1956年環境創造学部長に就任。その後、財政学、地方財政論が主著に「新財政学」など雑誌「クオーラル」などに寄稿する。

2006年6月6日 第三種郵便物認可 2010年3月1日発行（毎月1回1日発行・通巻51号）

'10 March
3

公明 KOMEI

てい談

「燃やさない文明」に日本は活路見いだせ

村沢 義久／斎藤 鉄夫／赤松 正雄

特集

協働型福祉社会のために

[対談] 安心して老後を暮らせる社会へ 増田 雅暢／古屋 範子

ケアの時代を豊かに生きる 渡辺 俊之

多世代共住・多文化共生をてこに 篠原 章

共助の仕組みをどう組み立てるか 山岡 義典

「政治と力ネ」で満身創痍の鳩山政権 山根 太一

地域が主導する食・農システムの構想 大澤 信一

一斉建て替えを迎える自治体財政 小林 潔司

容貌障がいと共に生きて 藤井 輝明

公明党機関紙委員会